

# 十万温州ミカンの隔年結果防止

## 第1報 摘蕾, 摘果が翌年の結実に及ぼす影響

申間新一・波多野洋・和田 稔(宮崎県総合農業試験場)

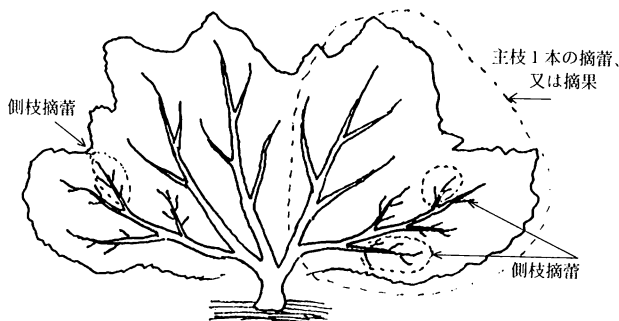
KUSHIMA, S., H. HATANO and M. WADA: Control of Alternate Bearing of Jiuman Unshiu (*Citrus unshiu* MARK.). 1.

Effects of Defloration and Fruit Thinning on the Bearing in the Following Year

十万温州は果形、品質にすぐれ、浮皮も少なく、貯蔵性のある西南暖地向きの晩熟系温州であるが、隔年結果性が強い。この防止方法を検討したので報告する。

### 1. 試験方法

表年の10年生樹を用い、①主枝3本のうち1本について全摘蕾(1980年5月7日処理)②1樹の側枝数のきについて摘蕾(5月7日処理)及び③主枝3本のうち1本について全摘果(6月23日処理)の3処理とし、1樹1区3反復の9樹を使用した。調査は各処理毎に前年の新梢10本にラベルを付し、新梢の発生数、伸長量、着葉数、処理年の結実果実の階級と品質及び処理翌年の収量などについて調査した。(収量は全樹)



第1図 摘蕾、摘果法の模式図

### 2. 結果及び考察

#### 1) 新梢発生数、伸長量及び着葉数

処理枝1本当たり(摘蕾、摘果した前年の新梢)から発生した新梢数は、主枝摘蕾区、側枝摘蕾区及び主枝摘果区とも3本前後で差はみられなかった。伸長量は各処理間に差がみられ、総伸長量は主枝摘果区が40.6cm、主枝摘蕾区が26.2cm、側枝摘蕾区7.1であった。これを新梢1本当たりで見ると、主枝摘果区が12.5cm、主枝摘蕾区が9.1cmで側枝摘蕾区の2.7cmに比べて前二区がいずれも長かった。着葉数は伸長量と同様な傾向がみられ、主枝摘果区>主枝摘蕾区>側枝摘蕾区の順に多く、新梢1本当たりでは、主枝摘果区が5.7枚、主枝摘蕾区が5.6枚であるのに対し、側枝摘蕾区は2.4枚と少なかった。主枝摘果及び主枝摘蕾は側枝摘蕾より結果母枝を長くさせ、葉数を増加させた。

#### 2) 処理年の結実果実の階級構成と品質

果実の階級割合では主枝摘蕾区、主枝摘果区に比べて側枝摘蕾区は2L以上の果実が64.5%を占め、大玉果になり過ぎる傾向がみられ、又果汁成分では可溶性固形物、糖度で側枝摘蕾区が主枝摘蕾区及び主枝摘果区に比べて低い傾向があった。しかし樹体間差があり、有意差としては認め

られなかった。これら三つの処理のいずれも階級、品質に悪影響はないものと考えられる。

#### 3) 翌年の収量

1樹あたりの翌年の収量は、主枝摘蕾区7.62kg(前年比32.9%)主枝摘果区6.95kg(20.8%)側枝摘蕾区2.04kg(8.9%)であった。主枝摘蕾及び主枝摘果は側枝摘蕾より、翌年の結実を高めることができた。しかし隔年結果防止策として十分な成果とは言えなかった。今後、別な面から着果促進の方法を検討したい。

第1表 新梢数、総伸長量及び総着葉数

処理	新梢発生数	総伸長量	総着葉数
主枝摘蕾	2.9本	26.2cm	16.5枚
側枝摘蕾	3.0	7.1	6.5
主枝摘果	3.5	40.6	18.9
L.S.D(0.05)	NS	25.9	8.9

注) 処理枝1本当たり(摘蕾、摘果した前年の新梢)

第2表 新梢1本当たりの伸長量及び着葉数

処理	伸長量	着葉数
主枝摘蕾	9.1cm	5.6枚
側枝摘蕾	2.7	2.4
主枝摘果	12.5	5.7
L.S.D(0.05)	5.3	2.7

第3表 摘蕾、摘果が階級構成に及ぼす影響

処理	2L以上	L	M	S	2S以下
主枝摘蕾	36.3%	30.2%	18.3%	10.0%	1.9%
側枝摘蕾	64.5	26.2	7.1	2.1	0
主枝摘果	49.8	29.2	14.3	5.6	1.1
有意性	NS	NS	NS	NS	NS

第4表 摘蕾、摘果が果実品質に及ぼす影響

処理	供試果実重	果肉歩合	可溶性固形物	糖度	クエン酸g/100g
主枝摘蕾	104g	75.9%	12.79	12.4	0.84
側枝摘蕾	115	76.6	12.11	11.9	0.91
主枝摘果	101	76.8	13.28	12.8	0.89
有意性	NS	NS	NS	NS	NS

第5表 1樹当たり収量

処理	1980年収量	1981年収量(前年対比)
主枝摘蕾	23.13kg	7.62kg (32.9%)
側枝摘蕾	22.93	2.04 (8.9)
主枝摘果	33.47	6.95 (20.8)